

2022 個展 それから

作品で表現する聚富の四季です。22展から約3年。その間制作した新作と旧作をあわせて発表します。ご覧いただくと幸いです。

早春

雪解けが進む。雪がわずかに残る鶯色の沼に倒木が半分浸かり、その陰影を映していた。特有の湿った空気に満たされる。5月になればヤチブキやニリンソウが沼地を覆うだろう。



初夏の風吹く頃

聚富の丘陵に沿って田圃が続く。時折新緑の稲穂に白鷺の姿を見る。餌を探しているのだろうか。垂直に細長い首を伸ばし、渡る風の声聴くかのような。



秋から冬へ イタドリが色づく頃



道端に沿って朱色に染まったイタドリの大葉が連なり鈴なりの白花が重なる。小下絵を作ろう。はやる気持ちで向かうと、路肩は整備されバツサリと薙ぎ払われてその名残もない。こうした場面を何度も経験した。「一期一会」とつい口に呟く。

刈り取りの朝



10月、聚富を抜けて本覚寺（望来）に向かう。道路を隔てて刈り取りが終わった田んぼが広がっている。田の角は稲刈り機が回転する場所なのだろうか、大きくめぐり取られ穂も乱れていた。轍の窪みに水溜まりができ秋の空が映っていた。いかにも刈取られた直後の早朝の草いきれが伝わる絵にしよう。

初雪の頃 初雪とアスパラ群

妙に心惹かれて今きた道を引き返す時がある。記憶が自分の引き出しを満たし絵になることもあれば、消えることも多々ある。雪

は景色を一変させ、澄みわたって清涼な景色を見せてくれから好き。特に初雪が降った早朝の空気感がいい。淡い雪をふわりと被ったアスパラの株間に足跡をみつけた。



冬の日



凍てつく寒さで雪被る樹々の他に生きものの気配はどこにもない。真冬の丘陵は凍結され時間が止まったかのように見える。ただ枝の風切り音だけがヒューッと聞こえた。

キタキツネが通る道

二月の聚富の日差しはキラキラと反射して眩しいが春にはまだ遠い。雪原の中央を若いキタキツネだろうか一筋の足跡を残してゆっくり進んでいた。ここにも春を待ちわびて兆しを求める命がある。やがてキタキツネは林の中に分け入っていく。雪被った木立の合間を茶褐色の尾が見え隠れして消えていった。



早春 春の足跡 水緩む時

谷地の一角に小沼が現れるのを確かめる。雪解けが始まった。雪に押しつぶされた葦は湿地に幾層にも横たわり、その上を踏みしめて慎重に歩む。時には枝を支えにしてなごり雪の上を進む。ようやくほとりに辿り着いた。雪解けからもう何度も通い入れた場所。そこには何処よりも早い芽吹きがあるからだ。

大好きな絵とともに

随分色褪せてしまったが、アトリエの壁面にいつまでも眺めていたい絵が止めてある。

牧谿 煙寺晚鐘図 宋元画 請来御物

絵には向こう（彼方）があるんだよと伝えてくれる。数多くあり東洋画の中でも挙げようと言われたら迷わずこれを選ぶだろう。



モネ かささぎ 1868

旅人の目線ではなく、定点観測のように居て見続けること。深く感じ共感すること。そうして生まれた絵が人の心を打つのではないだろうか。何気ない雪の日のキラキラと輝く美しい情景として心に沁みる。



猪原大華 蓮池

筆跡は粗いがなぜか心を捉えて離さない。いつかこういう「いい絵」が描けるだろうか。まるでロンダーニのピエタのように追い求めても尽きないノミ跡のように僕には思えてならない。

